

育児情報源としてのFace to Face  
コミュニティとその影響

河 田 承 子

## 要旨

1960年代以降、育児情報が主な情報提供源として大きな役割を果たすようになってきている。村松(2000)によると、育児情報は、「メディア情報」と「パーソナル情報」の二つに大別され、母親は自身の教育観に基づき、情報を収集している。パーソナル情報とは、人を介してFace to Faceの場から得られるものであり、本研究ではFace to Face情報と呼ぶことにする。齋藤(2002)は、実際の育児を行っている人達の悩みや相談事を聞くこと、あるいは、あらかじめ他人の経験談を通して疑似体験することが、育児という未知の不安を軽減できると述べている。従って、不安の解消には、メディアからの情報に加えてFace to Faceの同じ年代や年上の子どもを持つ母親からの情報が必要不可欠である。しかしながら、Face to Faceコミュニティから母親がどのような情報を得て、精神的な支えを受けているのかは明らかになっていない。

以上を踏まえ、本研究では、「未就学児の教育」に関する育児情報を集めるという場面に限定しFace to Faceコミュニティ、メディアや人などの育児情報源、情報収集力、母親の心理状態の関わり方を明らかにした。

調査方法としては、東京都北区の保育園および幼稚園に通園する未就学児を持つ母親454名から質問紙を郵送で回収し、分析を行った。分析方法としては、クロス集計及び相関分析を用い、クロス集計では検定にカイ二乗検定を用いた。

その結果、母親は情報が欲しい時にメディア情報を利用し、収集した情報に満足している一方、Face to Faceコミュニティからも心理的に良い影響を受けていた。そのため、Face to Faceコミュニティの減少が指摘される現代においても、その存在が母親にとって重要であることが示された。

特に本研究では、夫の育児行動が母親の子育て満足感と関係することが明らかにされ、自分を理解し受け入れてくれる夫を持つか持たないかで、子育ての充実度が変わってくることが示唆された。